

ハイテク世界の伝書鳩

科学的に人間の脳に適応すると判定された新元号が発表されてから、六年半が経った。

二十一世紀に全世界を震撼させた伝染病は、歴史好きの間で密かに話題の種になったり、ならなかったり。今の学校では特別授業として、その当時の映像や見てデータを聞き取り、感想や考えたことを録音して提出させることがトレンドだ。後世にその事実を伝えていかなくてはならない、歴史的一幕を飾っている。そのところに起こったらしい一斉休校について生徒が面白おかしく言おうものなら、先生から大目玉を食らう羽目になる。

そんな歴史の中で人類は、幾千年もの間保持し続けてきた一つの発明を放棄する道を選んだ。増えすぎた情報、複雑化しすぎたシステムを簡略化するために、切り捨てられた、一つの技術。

「次はこの字」

そう言い、目の前に広がる一枚の薄い紙に一つの記号を書き加える文哉。彼が握っているタッチペンは、黒鉛によって紙に直接書き込める代物らしい。摩擦によりその跡を消すことのできるプラスチックとセットで使い、あらゆる形を描写できる。

文哉は丸まったフォントで小さく五本の線を引き、持っていたタッチペンを机にこつんと置いた。

「これで、せい。生活とか、生命とかの」

椅子から身を乗り出し、文哉の書いたその文字を眺める。デバイス

ス上で映し出される綺麗な形をしたイラストとは少し違い、全体的にいびつな印象を受けるフォントだ。

「ここは……えっと、はらいって書き方だっけ？」

由梨の何気ない質問に、文哉は何も言わないまま首肯する。由梨がそのまま紙に映る「生」の記号に視線を移すと、文哉が持っていたタッチペンを差し出してきた。

由梨がそれを取ると、微かに文哉の口角が上がったような気がする。本当に些細な変化だが、彼の自称するポーカーフェイスにはやっぱり程遠い。

「やっぱ文哉って分かりやすい」

「急だね……何が？」

「なんでもないですよー」

どうせそのまま言ったところで伝わらないか、拗ねられるかのどちらかだ。面倒事は避け、こちらから話を引っ込める。文哉の頭の上にクエスチョンが浮かんでいるような気がするが、構わず紙に跡を付けていく。

文哉の書いた形を見ながら、一本ずつ真似ていく。なるべく文哉が書いていた時と同じようなペンの運び方で。前に聞いたところ、丸まった字形は彼の特有のものらしく、そこまでは真似なくていいとのことだ。

「……雨か」

由梨が四本目の線を書き足している最中、視界の端でカーテンの隙間から覗く窓の景色を眺めている文哉が、ぽつりとそう言葉をこ

ぼした。

最後の横線を書き入れ、肺の空気を外に送る。文字を書いている間は、どうしても息が詰まってしまう。線の一本ずつに何かしらの意味が込められていると思うと、気軽に書いていくことができない。「今日はずっとこんな感じらしいよ。降るならこんなちよつとずつじゃなくて一気にまとめてきてよね」

「そう？ 僕はこれも好きだけど」

部屋のじつとりとした空気が肌に張り付き、妙な不快感を覚えさせる。雨の音自体は嫌いじゃないが、そこから帯びる湿気が一番の問題だ。特に花の女子高生である由梨にとっては、死活問題と言っても差し支えない。

彼の発した言葉に眉を顰めつつも、自分の書いた出来立てのマークを指さす。文哉の書いたやつよりも一回りほど大きく、線も角ばっている気がする。美術じゃないことも承知の上だが、もう少し細部をこだわりたい気持ち芽生えてきてしまう。

文哉は由梨の書いた文字をじつと見つめたまま、お地蔵様のようにな固まった。他の誰にも触れさせず、話しかけさせまいとするオーラを纏っていたままで。もっとも、本人にそのつもりはないのだからうけど。

「……いいね。綺麗」

そのまま静かな時間が流れ、いい加減何か言ってやろうと由梨が口を開きかけた時、文哉が口を開いた。小さくて細い、何かの衝撃でかき消されそうな声で、彼は言った。

由梨の書いたばかりの記号を、愛でるように人差し指で触れる文哉。我が子を見つめる父親のようなその仕草に、妙なくすぐったさを覚えてしまう。

「この字には、まだ読み方があるんだけど」

由梨の大きな生の字から手を離し、また窓の外を見ながら文哉が語り掛ける。

「……そろそろ日も暮れてきたし、今日はこころへんで」

雨雲の影響もあるのだろうが、外はもう夜寸前の薄暗さを見せていた。

「ん、おっけー。じゃあお母さんに連絡しちゃうね」

そう声を上げた由梨は、物心がついたころには既に配布されていた一つのデバイスをカバンから取り出し、電源を付けた。目に優しく、学習の妨げにならないよう設計された白色の蛍光灯が灯る教室に、無機質な電子の光が浮かび上がる。

赤みがかったピンク色の画面からいくつかの四角が飛び出してくる。マイク、補聴用イヤホン、道と旗、犬と猫など、様々な形が簡潔にかたどられたマークを眺めつつ、目的のアイコンのある画面へとスワイプしていく。

空中でぐるぐると回り続ける光を撫で、人が声を発しているイラストを確認し、人差し指でタップする。浮かび上がったいくつかの候補のうち母親のアイコンを見つけ、そこに指を乗せる。

「由梨です。今から帰るからお風呂つけといいてー」

「はいはい。気を付けてらっしゃい」

簡潔な会話を終え由梨が指を離すと、通話状態が解除される。録音に録画、通話、道案内、音楽。言葉通りなんでもできるデバイスをカバンにしようと、文哉は机の上にあった教材を全て片付けていた。「帰ろう」

ゆつくりと、言葉の一つ一つをなぞるかのような優しい声音で、文哉はそう呟く。かろうじて耳に届いたその言葉に、由梨は大きく首を縦に振り、二人そろって教室を出た。

「やはり疲れますなー朝から晩まで勉強ともなると」

腕を組みながら唸る由梨を横目でちらりと見るも、文哉は何も返さずに視線を前へと戻す。

廊下のいたるところに貼られているポスター。各講座の受講認証マークが載せられていたり、次の生徒会長選挙に向けた各立候補者の顔写真と公約のダウンロードリンクが張られていたり。こうして改めて見てみると、紙という媒体に載せられる情報はすべて、デバイスによって読み取られるものばかりだ。

「やっぱりこういうポスターにも、文字ってあった方がいいのかな？」

由梨がつぶやいたその言葉に、文哉は小さくこくりと頷いた。

「きつとね。文字だと一目見て理解できる」

「音声……言葉でも伝わると思うけど？」

「視覚から訴えるのも、有効」

文哉が少し言葉に詰まり、そのまま会話が終わる。そんなことの繰り返し。

人類が文字を捨ててから、何世紀もの時が流れた。

イラストやマーク、音声データ。文字以外の手段にて、情報の伝達が行われる。

そんな世界で開かれる、放課後の二人だけの七時間目。文哉による文字講座を終え、頭がへとへとになった女子と、一切の疲れを感じさせない男子は、ともに校舎を出て帰路についた。

「う……母さんのいじわる。どーして起こしてくれないのさ」

朝のホームルーム直後。近くでなければともに聞き取れないような籠った声で由梨は愚痴をこぼした。机に上半身を預け寝そべる彼女は、このまま机と同化してしまいそうだ。

生徒らの朝の眠気を最高の効率で吸い取れるよう設計された教室の明かりをもっとしても、由梨の睡魔は一步も譲らない。誰もが羨むような心地よさげな面持ちで、陽の光を受けながら由梨は夢の世界への準備をまさに終えようとしていた。一限の予鈴が高々に響こうとも、だ。

「おいばか。早く起きて支度しろよ」

そんな言葉通り夢見心地な彼女の背中に、なかなか重い一撃が食らわされた。

「ちよっ、いきなり何すんの」

「何すんのはこっちのセリフだ。昨日宿題用に貸したあれ、早く返してくれ」

次の時間必要なんだ。と悪態をつきながら取り立ててくる凜。全

体的に短めな髪と、最近になってようやく女子の着用が許可された黒ズボン。それとこの男勝りな口調のせい、ぱっと見本当に男の子のようだが、れっきとした可愛いらしい女子だ。

「朝から竹刀で叩かれましたーって顧問に告げ口しよっか？」

「でたらめ言うな。ちゃんと素手だよ素手」

黒い手袋を付けた左手をひらひらさせながら答える凜は、わざとこちら側にも聞こえるような音量でため息をついた。

「もちろん？ そんなの承知の上ですよ？ ほらほら、言われたくなかったら私に何か痛っ」

呆れた表情のまま見てきた凜を少しからかってみれば、今度は頭上からチョップが飛んできた。先ほどの一発で頭も体も起きているせいで、前の一撃よりもさらにじーんと痛みが伝播してくる。

明らかに不機嫌そうな目でこちらをじっと見つめてくるので、少しばかり申し訳なくなってくる。次何か変なことを言おうものなら、本当に竹刀でも持ってくるのではないだろうか。

「……こんなことやりに来たんじゃないんだけど？」

「そんなに強く叩かなくてもいいじゃん……凜ちゃんの短気女」

「もう一発必要か？」

「すみませんでした」

手首をひねりながら素のテンションで聞いてくるものだから質が悪い。これ以上もらったら由梨の授業にまで響きかねないので、こは大人しく引くほかないだろう。

いつも通りの会話ではあるものの、彼女の声からは不満の色が滲

んでいるような気がする。あまりはつきりは言えないが、全体的に、どこか威嚇中の猫のような不機嫌さを感じる。

「凜、朝練中に何かあった？」

こういうのをストレートに聞いていいものか分からないが、問うてみないことには話も進まない。このまま見て見ぬふりをするのも眠り心地が良くない。

「あー……いや、何かあったわけでもないんだが」

齒切れの悪い言い方で返す凜に小さく頷き、続けるよう促す。

「ほら、風来っているだろ。二号館の変人」

「風来くんって、文哉のこと？」

「多分お前が考えてるやつで正解」

凜が後頭部を掻きながら教卓の方を眺める。チャイムと同時にひっくり返された電子式の砂時計の砂がまだ十分に残っていることを確認し、ぼつぼつと語り始めた。

「あいつがまた変なことしてるらしくてさ。先生からあいつへ届けてくれてでっかい紙束を渡されて」

心底面倒そうに首を振る凜。彼女の性格からして、こういう厄介ごとに巻き込まれるのは人一倍嫌気がさすだろう。言葉の中に若干の引っ掛かりが見えたのも、恐らくそれが原因だ。

「今日は休みだから明日の部活前に渡しに行け、って言われても、運動前にあいつと話すだけでやる気がそがれそうだから。どうせ先生だって押し付けたいだけのくせに、生徒が渡した方がって濁しやがった」

「あらあら、それはそれは大変そうなことで」

「他人事みたいに言いやがって」

「実際そうだもん」

確かに、文哉と運動前に話すのが憚れるのは分からなくもない。亀のようなゆっくりとした話し方のせいかな、彼と話すとその後にくのは気が乗らない。彼にその意識がないのは間違いないのだが、それとこれとは話が別。

「……私が代わってもいいけど？」

今から放課後のことを考えて顔を暗くしている凜に、さりげなくそう告げる。まるで今、ふと思いついたかのような素振りです。

「どうせ部活ないし、最近面白そうなクリアがあるからそれ見て帰ろっかなって感じだったから」

立体音響と三次元映像作品の融合……歴史の授業で扱われたこのクリアは、次世代の映像娯楽として派遣を握ったらしい。それまでは場面変化はおろか、映像が観客のところまで飛び出さなかったとか。

「まじ？ え、助かるけど、何でそんな」

「うーん……凜ちゃんに恩を売れるからかな？」

一瞬明るくなりかけた凜に満面の笑みでそう言えば、凜は少し怪訝そうな眼差しを向けてくる。

「貸し一つ、ね？」

「……そういうとこ、本当に油断ならない」

「頭が切れると言ってほしいねえ」

「はいはい。ま、正直助かるから頼む。悪いな」

手を合わせて感謝されると、素直に喜んでいいのかどうか分からなくなってくる。曲がりなりにも同級生との会話なのに、ここまで忌避されるのはかわいそうな気もする。半分は自業自得なのだけだ。

凜にはとりあえずグッドサインを返しておく。これで貸しを作れるのならお安い御用だ。とりあえず、どの飲み物を頼むかは決めておこう。

「で、端末は？ もう時間ないんだけど」

前にかけられている砂時計を指さして言う凜に、すーっと背中に汗が流れるのを感じる。見れば砂はもうあまり残っておらず、ほかの生徒たちも解散して各々の準備に取り掛かっているようだった。

日常生活用として国から配られているデバイスとは違い、もう一つ学校から貸与されている端末。授業に必要な情報を集約した、授業用端末だ。

「……次、化学演習だっけ？」

「だから取りに来たんだろ」

「それ、絶対に必要？」

「お前……まさか」

凜の目から光が消えた。呆れか絶望か、はたまた怒りか。彼女の目からは何かしらの感情が失われ、そのうちのただ一つに支配されているように見えた。

「……ここで借りを返していただく、っていうのは」

言い切る前に、由梨の頭上には本日三回目の一撃が加えられた。

六限の授業分の砂時計が落ちきり、終業を告げる鐘が校舎を包む。クラスの面々は伸びをしたり目覚めたり、首を回したりと様々の反応を見せている。

外から差し込む光が夕焼けの様子を帯びてきている。少し前まではまだまだ昼真った中だった分、目前に迫っている秋の訪れを感じてしまう。

由梨が自分の手元に視線を落とすと、昨日教わった「季」「節」の二文字が……いや、それに似た何か別の字が書かれていた。

美術史の授業ではどうもこんなことが繰り返される。美術史自体は面白いのだが、いかんせん話し方に面白みがないのだ。その内容もほとんどが先生の好みと思しきものばかりだし、将来の仕事に役立つとは到底思えない。

椅子に座ったまま号令がかけられ、何も考えないまま頭を傾ける。クラスのその様子を一瞥もしないまま先生が教室を出ていくと、それと入れ替わるように担任がずかずかと大腿で入ってきた。

「おい席に着けー。パッドはしまう。鶴崎も静かにしろー」

「すみませーん」

「よしイイ子だ」

オレンジの半袖シャツの体育教師、通称オレ半が汗を額に滲ませながら生徒と話す。朝の先生は暑苦しいが、帰りの先生も変わらない。寝起きだからとかじゃなく、根本的にこの先生のテンションに

は付いていけない。

「ん、みんないるな。いい顔してる。最高」

一昔前なら何かのハラスメントにでもひっかりそうな発言に、思わず苦笑を浮かべる。

今でこそ教員の地位が上がってきて保護者や各団体に反抗できる立場を得ているが……そんなことがある前でも、この人は素知らぬ顔で同じようなことを言っていそうなものである。

「伝達事項なし。遅刻早退もなし。以上解散」

デバイスに向けてハキハキとそう言うオレ半。その言葉を皮切りに、座っていた生徒たちが雑談しながら席を立ち、教室を後にしていく。

「オレ先生ーいいですか？」

生徒の大方が教室を後にして、教室が少し広く感じられる。デバイスからの光が収まり、先生の仕事が終わったことを確認してから、由梨は声を上げた。

「近宮か。どうした、珍しいな」

「質問したいことがあって……これなんですけど」

そう言い、由梨は持ってきた紙に記された二種類の文字らしきものを見せる。

今朝文哉から、今日は欠席するという旨のボイスメッセージが届くため、疑問を文哉に投げることはできない。いや、不可能ではないが、返答が来るよりも次に会う時の方が早いことは間違いない。

「この二つの文字で、あの彼から教わったんですけど、なんか違和

感があって……どこが違うか分かりますか？」

次に会った時でもいいが、それだとその時まで心が落ち着かない。むずむずと体の中の何かが動いて、自分を居てもたっても居られなくさせるのだ。

オレ先生こと住風先生は、受け取った一枚の紙をじっと見つめ、やがて細長く息を吐いた。

「……近宮。俺に分かると思うか？」

「先生なら彼ともよく話してますし」

「とはいってもな……その、なんだ」

この人にしては珍しく、何か苦いものでも飲んだかのような顔をして言葉に詰まっていた。

雲から姿を現したらしい太陽が、夕日を目に差ししてくる。反射的に目を細め、窓のない右側へ視線をやる。

「あんま無理するな？ 無意味だとは言わないが……文字なんて結局は過去の産物なんだ」

バツが悪そうに視線を逸らしながら先生は続ける。

「あいつに影響を受けて、近宮までおかしくならないようにな」

先生が黒インクの付着した紙を返してくる。それを受け取ると、自分のデバイスと他の持ち物を脇に抱えたまま教室を出ていった。

教室には私と、もう一人席に座って何かしている男子だけが残されていた。彼はデバイスから放たれる光に完全に意識が持っていないように、こちらの様子など全く気にも留めていないようだった。

なんとなくその場に立ったまま外を眺める。由梨たちの教室が二階にあり、木も丁度生えていない区画だったため、そこそこ眺めは良いほうだ。

夕焼けに照らされる建物やグラウンドを見る。まだ終業からあまり経っていないせいか、部活の人の声も聞こえてこない。電工部の甲高い電子音も、まだ鳴りを潜めている。

……今日は七時間目もない。帰りに寄ろうとしていた店は今度凜が剣道のない日にでも行こうか。

そう思い、万能な音声デバイスを起動し、由梨は母親にいつもの連絡を入れた。

「ねえ文哉」

次の日の放課後。二日ぶりに開かれる七時間目の準備をしている文哉に由梨は声をかける。

案の定というべきか、文哉からは何の反応帰ってこない。本当に聞こえているのか疑わしくなるほどに寸分の狂いもなく、ただ肅々とタッチペンとかの用意を進めている。

「どうして文哉はそんなに文字が好きなの？」

そんなロボットのような文哉が、由梨のその一言で動きをピタリと止めた。機械で言えばシステムエラーか危険察知か、何かしらの不具合が起こったかのような、不自然だが自然な人間味あふれる仕草。

「前に言った通り」

数瞬の停止を終え、ぼつりとその言葉を落とすと、二人の間に沈黙が降ってくる。

部屋を照らすはずの夕日は、閉め切られたカーテンによってその力を減衰させられている。蛍光灯もまだ点いておらず、窓辺の席だからこそ多少なりとも受けられる日光の恩恵を享受する。

「小学校の、それも低学年の頃の話でしょ？ 何か変化とかあるのになって」

「特にないよ」

由梨が問い詰めても、文哉はどこ吹く風と準備を再開した。カバンの中からデバイスと四、五枚の紙を取り出し、文哉は一つ長い息を吐いた。

彼の目が机の上のペンから由梨の腹部あたりへと移る。何か汚れでもついているのか、他の何かでも考えているのか。どちらにせよ、あまり不躰に眺められるのは心地よいものでもない。

「どうかしたの？」

由梨がわざとらしく棘を含んだ言い方でそう言うと、彼は由梨の目を少し見て、すぐに机へと逸らした。

「……言葉だけじゃ、伝わらないことがある」

「……え？」

「強いてあげるなら、これに気付けたこと」

それが変化。そう言い、文哉は黄緑色の椅子へと深く腰を掛けた。ペンを握り、何食わぬ顔で紙に何かを記し始める。

これ以上何かを言うつもりもないのだろうか。詳細を話す気なん

て、彼にはないのだろうか。

変化に乏しい黒の瞳から覗く小さな揺らぎのような何か、由梨には見えた気がした。さらに聞けば、彼に嫌悪感を抱かれることも容易に想像がつく。

「って、全く分からないんだけど？」

そんなことで引き下がるほど、由梨は物分かりがイイ子ではない。これに関しては、匂わせるような発言をした文哉に圧倒的な非があると言わんばかりの剣幕で、机に強く手をつき由梨は迫る。

「もっと詳しく教えて」

「いや、その……」

「何かあったの？ 誰かに言われたの？」

「だから」

「先に言ったのは文哉だからね？ ちゃんと説明して」

「……由梨じゃん、初めは」

右手にペンを握りながらこちらを見ていた文哉が口をはくはくと動かす。由梨からの攻撃が終わってから、ようやくまた一つ、今度は大きくため息をついた。

「言葉だと、届かないことがある」

観念した様子で文哉が視線を落とし、そう独り言のように呟き始める。

「文字だったら届く。たとえば言葉の辿り着けないところでも」

文哉の視線は、また由梨の腹部あたりに向いている。腹部よりも少し右側……彼女のカバンやら、ずっと放置され埃を被っている段

ボールがある部屋の隅を見ているようだった。

「でも通話機能があれば、それでいいんじゃないの？」

由梨のいつもと変わらないテンションで聞いたそんな問いに、文哉はゆっくりとかぶりを振る。由梨の言ったことを否定する、というより、自分と相手に言い聞かせるような動きで。

「じゃあ、電子が遮断されてるような、そんなところだったら？」

文哉が目を細め、何かをじっと睨むような顔つきになる。由梨の最近気になり始めたお腹を貫くようなその視線に、思わず息をのんでしまう。

そのままいくらか時間が過ぎ、静かな部屋には廊下を走る生徒の足音だけが響いていた。そんな沈黙を先に破ったのは、いつの間にか元の微かに笑みを湛えた表情に戻っていた文哉だった。

「そう思うと、文字って力があるんだなって感じるんだ」

顔が上がり、由梨の目を見つめ、口元に緩やかな弧を描く。文哉の珍しい表情に、由梨は一瞬たじろぎつつも、ちゃんとそれなりの笑みを返した。

授業を始めようか。と聞いてくる彼に、無言のまま首を縦に振る。

由梨も隣の水色の椅子に座り、文哉の手元へと意識を向ける。おそらく、昨日の続きの「生」に関するところから始めるのだろう。

これが彼なりの精一杯。幼馴染だろうが他人に話せる限界なのだと、その数年の経験が伝えてくる。

さらに詰めても、彼を困らせるだけだと。

今日のところは、ここまで聞けただけ十分だ。少しずつ、しかし確

実に、文哉を捉えられている。

そんな願望にも似た想いを胸に、知らぬ間に入っていた両手の力を緩め、由梨は文哉の声に体ごと耳を傾けた。

そんなやり取りがあつてから砂時計が二周半ほどしたころ。由梨は心の中で――いや、しっかりと口から悲鳴を上げていた。

「これだと「せい」、この言い方なら「しょう」……「じょう」？」
彼女が頭を悩ませているのは文哉についてのことではない。部屋の暗さは蛍光灯で解消されたし、正六角形のペンだって最近は握り慣れてきた。

「一つの字に……こんだけ大量の読み方を付けたの……？」

文哉の口から紡がれる読み方の数々。どれも日常でよく使うフレーズだというのは分かるのだが……にしても多すぎる。

送り仮名、というものによって読み方が変わるものは今までにも何文字かあった。三通り、多くても四通りくらいなら、初めは抵抗があったけれど、まだ納得できる領域だ。

送り仮名がつかない読み方も、二通りまではなんとか使い分けられた。木に「ボク」と「モク」があるのも、割とすんなりと文哉にオーケーサインを出すことができた。だというのに……。

生きる。生まれる。生える。生真面目。生もの。生物。生涯。

文字を使っていたころの人たちは、日常生活で何を考えていたのだろう。普通に生きていて、この字に会った瞬間にどの読み方が適切かを総当たりでもしていたのだろうか。

「これは僕も、しばらく慣れなかった字だね」

まともに理解するのに一週間はかかったと、何の気なしに文哉は言う。

由梨と比べてかなりの長期間、文字と触れ合っていたであろう文哉にもそれだけ時間がかかるのなら……想像するだけで嫌な寒気が体を走った。

「今日と明日は、この字だけのつもりだから。焦らないでいいよ」

「あと一日でこの量を……？ 文哉がそんなにかかったのに？」

「由梨ならできる」

まっすぐに純粋な目で、けろりとそう言っただけの文哉に、由梨は返す言葉をなくしてしまう。

文哉のこういうところは本当にズルい。ここで言い返せる人なんて、この世界に一人としていない。

彼のこの信頼感はいったいどこ由来なのか。思考をめぐらせても皆目見当もつかなかった。というより、ついたところでこの文哉からの課題から逃れられるわけでもないのだから、考える意義も感じなかった。

「……やめておく？ 他のことでも、何か」

由梨のささやかながらに重くのしかかる不安な表情を一瞥し、文哉が問いかけてきた。

自分が無理難題を与えていることに全く気付いていなさそうなその瞳は、純粹に由梨を気にかけてくれているのだとはつきり思わせてくれる。

文哉のことだから、ただ乗り気じゃないとか、そんな理由だとも考えているのだろう。

「やめない。やめないけど……けど」

すんなりとここで引き下がるのも、どこか負けた気がする。文哉とこの生の字に負かされた、なんて寝つきが悪いなんてものじゃない。

唇を噛み両目を一度ぐつと閉じて、言葉に詰まる。そんな様子を、文哉はただじっと、きょとんとした顔で眺めていた。

「……今日のところは、いったん終わらせて帰らない？ もう日も落ちてきてるし」

「うん……？ まだいつもよりは」

「そう言う気分だから！ いいでしょ？」

もうこれ以上戦ったところで、これ以上の情報は頭の中に入りそうもないというのも事実。文哉の言うように、一朝一夕で勝てるような相手でもないのだ。

ならば、戦略的撤退。負けたのではなく、勝つために引き下がる。明日までに脳を整理してこの文字に打ち勝つ。

そんな常識外れな決意を胸に抱きつつ、由梨は未だ納得してなさそうな文哉を丸め込む。文字では勝てなくとも……言葉なら、この人に敗北を喫する筋合いなど一切ない。

「あーお母さん？ 今日はどう帰るから。うん、終わりー」

言うが早いか、由梨はカバンから今日一日使い続けたデバイスを開くと、手慣れた操作でいつもの報告を済ませてしまう。画面越し

の母親の声に軽く返事をしてから再び仕舞い、文哉に向き直る。

「……分かったよ。帰るから」

無言で彼の瞳を見続けると、流石の文哉でも意図を察したらしく、諦めを隠そうともしない顔でため息を一つ吐いた。

「それでいいのだよ文哉くん」

得意げに胸を張る由梨の姿を見てから、文哉は机の上の紙とタッチペン……彼が言うには、鉛筆を片付けていった。

夕焼けがきれいな時間から少し過ぎたあたりだからか、徐々に空からは明るさが失われてきていた。

文哉を待つ間、窓辺に寄って外を見つめる。空がきれいなグラデーションを帯びており、特に何があるわけでもなく感傷に浸りたくなってしまう。

自分たちのいる校舎の二階よりもずっと高層のビルを見上げてみれば、一つ一つの窓に、かろうじて残っている、空が燃えているような色が反射していた。

「いいよね。この景色」

由梨が外の光景に意識が吸い取られていると、不意に背後から文哉の声が聞こえてきた。

あまりに唐突な呼びかけに、故障音のような変な声が漏れてしまった。不意を突いてきたことに不満の表情を向けるも、文哉は外を見て目を合わせようとしめない。

「一日の内で、一番好きな時間だと思う」

窓から見える外の世界を噛み締めるように話す文哉。普段は授業

で見ないけれど、それがもったいなくなるくらいには綺麗な眺めだとは思う。

「文哉が遮らなければもつとよかったのになー」

すまし顔で外を見続けている文哉にそう言うと、くすりと一度笑って自分のカバンが置かれている椅子へと戻っていつてしまった。

由梨の反応を楽しんでいるようで、由梨からすると面白くない。自分ばかりいじられていては不公平だろう。

「私先に出てるから。早く来てね」

仕返し、というわけでもないが、デバイスで何かを操作している文哉を後目にそそくさと教室を後にする。

出ていく直前、背後から何かがぶつかったような鈍い音が鼓膜を叩いてきた。おおよそ、文哉が椅子か画材にでも躓いたのだろう。あえて振り向かず、由梨はそのまま未だ手動式のスライド扉を閉めた。

家の前に立ち、扉の横にあるリーダーに目を合わせ、全身をスキヤンされる。開始から十秒も立たないうちに、目の前の戸から心地よい開錠の音が響く。

靴のまま二階へ上がり、「ゆり」と書かれた札が掛かっている扉を開ける。

小学生のころ、初めて文哉に教えてもらった二つの文字。これで自分の名前を表現できると知った時は、少しだけ文字の凄さを実感できたような気がしたのをよく覚えている。

着替え専用の小部屋に入り、青色のボタンを押す。自動で着替え

ができるおかげで、朝も帰りも時間を節約できて助かる。高校に入るまでは使わせてもらえなかった分、初めて入った時の感動は入った。

「おかえりなさい。ご飯できてるけど食べる？」

「もちろん！」

「はいはい。準備するわ」

デバイスから鳴り響く母親の声に、普段着に替えられながら答える。多少離れていても映像や音声を飛ばせるのは、電子の強みだろう。

堅苦しい制服から寝間着に近い普段着に入れ替わり、髪を下ろして下の部屋のリビングへと向かう。軽やかな足取りから生まれるテンポのいい音が通路に響く。

どうやら凜の家とは、大体の食事をサプリメントで終えてしまいうらしい。最近だとそういう家が増えてきて、飲食店は未曾有の危機にさらされている。結果、古き良き伝統料理を守ろうと、国が自炊を推奨する政策を打ち出すくらいだ。

食事なんて味わってこそだと信じている由梨からすると、サプリメントで済ますなんて想像すらできない。凜はその方が栄養面やバランスが……とか言っていたけど、やはりどこかもったいなさを感じてしまう。

「たっだいまい」

「おかえり。弁当箱と箸、入れておきなさい」

自動ドアが静かに開き、柔らかな白色に照らされたリビングへと

入る。歩を進めていくと、どこか香ばしい魅惑的な匂いが頬のすぐ横を通り過ぎた。これは……。

「唐揚げ！」

「……そんな叫ばなくてもいいじゃない」

耳を撫でていく揚げ物の音。他の食べ物では決して生まれないこの犯罪的な香り。そして、目の前で母親が皿に移しているナチュラルブラウンの塊。

伝わってくるすべての情報が、それがそれである確固たる証左として脳に伝達される。それを認識した由梨の頭は、お腹と口をすでに臨戦態勢へと移行する命令を終えていた。

「消毒はしたの？」

「もちろん」

「デバイスの充電は？ 制服は片付けたわね？」

「当然！」

「……はいはい。食べていいわ」

母親との問答の末、食事の許可が下りた。目の前にエサが吊るされた馬の映像を見たことがあるが、今ならその気持ちが容易に想像できそうだ。

さっそくと言わんばかりの速さで唐揚げを一掴みし、丸まる口の中へと放り込む。

噛まずとも伝わる衣の塩味が舌を刺激し、極上の快感を与える。ゴツゴツと角ばったそれを、言葉通り噛み締める。肉からしみだしてくるあまい汁と母親特製のスパイスが口いっぱいになり、思わ

ずほおが緩んでしまう。

一度噛めば衣特有の軽やかな咀嚼音。二度噛めば柔らかな肉と硬い衣のセットアップ。そこにお米を投入すれば……。

「んー！ 母さんこれ最高！」

もはや言葉では言い尽くせないほどの幸せが全身を支配する。目一杯口に入れ、その恩恵を最大限享受しようと由梨が頬をリスのように膨らませる。

「ゆり。あんまり急がないの。ご飯は逃げないわよ」

「んんんんんんん」

当然、母親の声掛けに反応するだけの余裕は残っていない。音の上下以外のすべての情報が削ぎ落された波だけが母親に伝わり、呆れたようなため息が間もなく帰ってきた。

「……っ。はぁ、幸せ」

緩みきったままの表情でそう呟くと、先ほどまで憂い顔だったはずの母親も笑みをこぼす。どんなロボットや人間に聞いたとしても、由梨ほどたったの一口でここまで人を惹きつける感想は出力できない。そんな不思議な自信を胸に、再び口に魅惑の茶色を放り込む。

「今日は早かったのね」

そのまま食事が進み、三つ目の獲物へ箸が伸びそうになったころ。首を傾げ、ふと思いついたような素振りによって梨に疑問を投げかけた。「ちよっと今日のやつが難しくて……ご飯食べたら頭回るかなーなんて思ったわけですよ」

「漢字だっけ？ 風来さんの奥さんから、次に教えるのわーって文

哉くんが言ってるって聞いたわ」

文字って複雑な形なのね。と軽快に笑う由梨の母親。

難解な形のまだ見ぬ漢字がたくさん載った表を見て、文哉が考えている姿を想像すると、どこか幼い子どもを愛でているような温かい感情が湧き出してくる。

「たった一つの字に何種類も読み方があるの！ 前後にある文字や状況によって判別する、とか言ってたけど。どう覚えてたらしいのやら……」

その子どもが座っている椅子ごとくると振り返り、変わらぬ笑顔のまま呪文のような説明を唱え始める。目の前に座っていた子どもは、いつのまにか不可解な文字の化け物へと変貌を遂げていた。

嫌に現実味の帯びた妄想を振り払い、落ち着いてから唐揚げをひとつ頬張る。近宮家ならではの一口サイズの唐揚げは、由梨の子どもころか変わらぬ好物の一つだ。

「……そんな固くならなくてもいいんじゃないの？」

三度目の悦楽に浸っている最中に届いた母親の声は、いつも通りの軽やかな声に、ちよっとした含みを感じた。冗談が多い母親からの不意なアドバースに、由梨は思わずむせかえってしまう。

「だから急がないでって言ったのに」

「こ、これは母さんが……さっきのどういう意味？」

「ん？ あああれね。なんだか由梨、学校の授業みたいな言い方するんだもの。由梨らしくないの」

いまいち掴みどころのない母親の言葉に、頭の中が疑問符で埋ま

っていく。

由梨らしくない……？ 真意は定かではないが、自分ではその自覚は皆無である。自分を見失っている何て言えるほど没頭しているわけでもない。

むしろその言葉は、あの文字信者の彼の方が似合いそうだ。

「覚える方法が分からないなんて、今まで文哉くんとの勉強会で聞いたことないのよ？」

「今までは……まだここまで難しくなんてなかったから」

「由梨の長所は好奇心なんだから。そこを忘れちゃだめよ」

由梨が何か言い返そうとするよりも前に母親は小さく笑い、自動ドアでリビングの外へ行ってしまった。階段をゆっくりと上がるスリッパの軽快な音がするから、自室に向かうのだろう。

「……よく分かんないや」

この部屋には由梨以外誰もいないのに、自分にだけ聞こえるような音量で言葉をこぼす。残念ながらデバイスには、人の真意を翻訳してくれるアプリケーションは備わっていない。こんなときに解説があれば、どれだけ便利なのだろうか。

一人で考えても埒が明かないと結論付け、由梨は四つ目に箸を伸ばす。空腹というスパイスが無くなってきても、母親の作る唐揚げは絶品だった。

「……あー。大体言いたいことは理解した」

次の日の朝。ホームルームの前のひと時を、由梨は珍しく眠気に

苛まれることなく生き永らえていた。返しそびれたデバイスをおそろおそろ返却したついでに、若干むっとしていた様子の凜に相談に乗ってもらった。

長袖の制服をまくりながらそう言葉をこぼす凜。内容はもちろん、昨日の放課後から由梨の脳内を埋め尽くしているあの漢字についてだ。

もちろん文字を知っていたり書けたりするわけではないが、相談相手も他にはいない。文哉に聞いても困らせるだけだろうし、何よりもあそこまで強く信頼を寄せてくれている彼に手放しで聞くことは、由梨の中に芽生えてしまったプライドがどうしても許さなかった。

「要は数がありすぎて混乱してるって状態だろ？」

「そういうこと、だと思う」

凜は女子の中でかなり背が高い。本人は否定したがっているが、一七〇近くはありそうな身長で、クラスの男子も半分ほどは彼女を見上げることになっている。

由梨は席に座って、凜が目の前に立っていることもあり、いつも以上に彼女の顔が頭上高くにそびえていた。

「部活でもよく使うけどさ、絵とかイラストとか使うと案外何とかなるもんだよ」

「……イラストで？」

「そそ。その、漢字？ ってやつにも使えるんじゃないのか？」

凜が発したアイデアに思わず自分の耳を疑ってしまう。何かの冗

談かと顔を見ても至極当然かのような表情でこちらを見ているだけだ。

文字とイラスト。視覚から入る情報としては同じ立ち位置に居るうなものであるが、その二つには明確な差異がある。

イラストの内容を説明するときに言葉は使われる。そこに文字を代用するのならば、文字はイラストを説明することができる。イラストで抽象化された情報を、言葉や文字を通して読み解いていく。

イラスト→文字ならば容易に理解ができる。言葉でなら日常生活でも頻繁に起こるし、なにより言葉の大きな役割の一つであるから。でも、それが逆転するとなると話が別だ。

「技とか振る舞いを後輩に教えるときも、声や音のデータだけだとしても実践に結びつかない。もっとこう、ぱっと伝わるやつが良いんだよ」

由梨よりも数段短い前髪をかき上げながらもどかしそうに言う。その姿は、由梨にとっては新鮮すぎて、本当に凜が言ったのかと疑いたくなってくるほどだった。

彼女が剣道を教えている姿を見たことはあるが、なんというか、非常に論理的な言い回しだったことを覚えている。その行動にはどんな意義があるのか、どんなリスクが伴うのか。すべてを完璧に言語化して伝えていたはずだ。

由梨が体験入部したときも、先輩相手に一切ひるまずに自分の論理を展開し続けていた。相手の意見も踏まえたうえで、自分の意見の正当性を伝える。まさに論理を体現したような姿だった。

「前は、ザ・理詰めって感じじゃなかった？」

「そう見えてたのかよ……確かに理論は重要だけど、伝わりやすさはまた別の話」

「……はええ。なるほどねー」

「絶対分かってないだろ」

「だって、凜っぽくないじゃん。ほんとに凜？ 偽物じゃない？」
由梨のわざとらしい誤魔化しに、おもむろにため息を吐かれてしまう。

完璧な論理で相手の意見をねじ伏せる彼女の姿はそこにはなくて、どのように後輩を導いていくのかを心得ている理想的な先輩が目の前に呆れ顔で立っていた。

部活にこんな先輩がいれば安心して頼れる、そんな存在。包容力にも似た柔和な言葉と突っぱねるような手厳しい言葉が衝突し、由梨の脳内は混乱の渦に飲み込まれそうだった。

「ともかく。論理もいいけど、直感に頼るのも忘れるな」

そこがお前の得意分野なんだから。そう言うてにかりと笑う彼女の姿はまさしく、かっこよくて憧れる先輩だった。いつもの拳骨を常に控えているような彼女とは、どうにも一致しない。

自分の視線の二倍以上の背丈で発されるその真っ直ぐな声に、由梨は次の言葉を忘れ、ただこくこくと頷くことしかできない。システムエラーを起こしたロボットのように、カクカクときこちない動きを繰り返すだけの人形と化していた。

「……で。あえて聞かなかったんだけどさ」

無造作に撫でつけられ由梨が一種の放心状態に陥っていると、彼女は其の真剣な眼差しから一変、獲物を見つけた猫のような顔へと変貌した。

「お前、風来と何かあんの？」

「へ？ どうして」

「だってそんな変なことやってるの、うちの学校であいつくらいだし。放課後に授業なんて、そんなに仲良かったんだ」

凜はすっかり凜に戻り、彼女の声には明らかなからかいの色が滲み出ている。普段の鋭利な冷気をまとった視線はなりを潜め、他のクラスメイトよろしく目の前の獲物を狩る獣の目をしていった。

「……文哉は私の幼馴染だし。ちょっと不思議なのも小学校から変わってない」

「え、は？ 風来と……ってまじ？」

「まじ。おおまじ」

白い蛍光灯に照らされた彼女の表情がさいころの目の如くころころと変わっていく。

「そんなに意外？」

まったくもって信じていなさそうな凜に、やや自嘲気味に笑いつつそう言う。一度も話したことがないから驚かれるのは想定内。にしても、ここまで訝る視線を送られてきては、こちらも肩身が狭いというもの。

文哉との放課後の授業は、あんまり大っぴらにしていない。文字を学ぶことが今の日本でどれだけ異質なのか、それを考えれば、文

哉のその忠告も納得がいく。

すでに廃れた文化、ましてやただでさえ複雑な情報をさらに混沌とさせるものを学ぼうなんて、数年前の由梨でも想像もつかなかったのだから。

「意外というか……まあ、お前が言うならそうなんだろうな」

「こんな嘘ついても意味無いし」

「それもそっか」

未だ呑み込めずにいる様子の凜だったが、何とか受け入れたように二度小さく頷いた。顎に手を当てて目を閉じるその仕草は、あたかも剣道の試合に出ているときのよう。全く関係のない話なのにそんな真剣さを醸し出せるのだから、由梨にとっては羨ましい限りだ。

「昔からの仲だから一緒に勉強会をする。ってことか」

右目だけちらりと開き凜は問うてくる。

「そういうことでもないと言いますか……文哉が真剣になってる文字ってものについて知りたくなっただけなんだよね」

「あいつ、そんな前から追ってたんだ」

「小学校のころにはもう、ね」

そう言って笑う由梨の頭の中にふと彼の姿がよぎる。

小学校に上がって初めて配布されたデバイスでみんながはしゃいでいる最中、教室の片隅でひとり固まっている一人の男子。他の男子たちがこぞって自分のアバターで殴り合いのゲームをしているのに、一人でデバイスすら触らずに、ただ黙々と何かに向けて手を動かしていた。

「特に高学年になってからなんて、学校を休んでまで勉強してたこともあったし」

「それはダメだろ……って今も大差ないか」

「おかげで連絡関係はゼーんぶ私がやらされたんだから」

十数年分の溜め息と共に首を横に振る。すーっと音もなく落ち続ける砂時計はあと四分の一ほどを残している。

あのころは文哉とのつながりが露呈するのなるべく避けていたのもあり、教師からその役を任されるたびに羞恥に身染めていた。結局女子は小学校も高校も、男子と二人でいるだけで恋愛事へといともたやすく結びつけてしまうのだ。それも家がらみの関係となれば、にやけ顔を隠そうともしない友達に問い詰められるのは当然のことだった。

「今日もするのか？ 授業」

由梨の言葉を合図に、頭を小学校から現在へと戻す。

「もちろん、というかほぼ毎日やってるし」

「……変人」

「凜には言われたくないな」

剣道、とくに竹刀について語るときの凜よりは数段ましに違いな。由梨からすれば、由梨と凜を変人かどうかでくらべるなら、どう考えても凜の方が変人なのだ。

上級生にも平然と論理で食って掛かり、親友ともいえる由梨の快眼中に何食わぬ顔で打撃を加える。そんな女子に変と言われるほど、由梨は堕ちていないはずだ。

「まあ頑張れよ。これ以上変になれたら私が困る」

「こっちのセリフですよーだ」

凜が後ろを向いて自分の席へと歩いていく。まだ何人かは立ったまま話し続けていて、その分狭くなった通路を軽快な身のこなしで進むのは、流石は運動部と言ったところだった。

「イラスト……イメージ」

凜が席についてデバイスの操作を始めたのを見てから、由梨は再び考え始める。今日の六時間の前哨戦が終わる前に、どうにか答えを見出すため、目を閉じて思考を進める。

傍から見ればいつも通り眠っているだけの由梨の脳内は、半ば形が怪しくなってきたあの記号と、彼女の知っている星の数ほどある読みだけが支配していた。

四限の途中からぼつぼつと降り始めてきた雨は、放課後に文哉と会うころにはバケツをひっくり返したほどになり、その勢力を確実なものにしていた。

六限の途中に教員含むクラス全員のデバイスに通知が届き、政府から各地方での推定降水量が知らされた。グラウンドには自動展開式の屋根が敷かれ、運動部は今もそこでいつも通りのメニューをこなしている。

太陽がその姿を隠し普段よりもいづらか教室が暗かったため、珍しく授業の開始前で文哉は蛍光灯の電気を点けた。窓から覗く雨雲と街は、まだお昼時にもかかわらず、見ていて微妙な不安を与えて

くる薄暗さを湛えていた。

「すごい雨だね……」

「天気の子報は難しいし、仕方ない」

「一応予報通りではあるんじゃない？ 十二時あたりから雨ってたし」

「……そうだったのか」

授業前の休憩時間の間に文哉とそんな会話をする。

文哉が天気予報を確認しないのは今に始まったことじゃない。中学校の休校連絡すら見ずに校門前で立ち尽くしていたという話を聞いたこともあるし、いまさらこの程度では驚きもしない。むしろちゃんと見てきたと言われた方が、由梨にとっては特報だった。

しばらく無言のまま由梨は窓の外を眺める。どこかの曲に今の状況にぴったりの歌詞があった気がするが、どうにも曲名が思い出せない。

窓に幾度となく衝突し垂れていく雨粒を眺めつつ思考を巡らし、文哉に呼ばれるまで記憶をさかのぼる。

雨が地を叩く連続的な破裂音。数えきれないほどの音の集合体が、ずっと一定の低さを保つ。その中に時々、一際高いピチツと跳ねるような音や、屋根に当たったような一層低い音が混ざり、一つの環境音を教室全体に奏でている。

後ろから薄い紙が擦れる音が聞こえてくる。タッチペン——鉛筆と、セットのプラスチック片も机に置かれ、文哉の授業準備が終わりに差し掛かるのを感じる。

文哉の細く長い息が、由梨に準備の完了を告げた。

「じゃあ、始めようか」

「うん。あ、でもその前に」

いつものようにペンを握り紙を寄せる文哉に、窓から離れ席に着きながら、そう言葉を重ね合わせる。

「私から一つアイデアを出させて」

由梨が突然そう言い出したのに対し、文哉はこちらをじっと見つめて固まった。信じられないものを聞いたとでも言わんばかりの表情で佇む彼は、文字の彫刻のように微動だにしない。

一向に何も言葉を返さない文哉に痺れを切らし、彼の持っていた長く鋭い黒色の鉛筆を右手から奪い取る。左手で抑えられていた三枚の紙もこちらに引き寄せて、自分の頭の中に芽生えた形を描写していく。

「これ。イラストを使うの」

一つだけ描いた図形を軽く塗りつぶして文哉の視線の先に叩き付ける。

「ハートマーク。こういうエネルギー感を感じをこの字に結びつける」

「……なるほど」

由梨が饒舌に六時間の思考の成果を語り、文哉の返答を待つと、小さく掠れるような声が鼓膜を優しく叩いた。

「抽象度を高める、そうして色々な読み方に対応する」

じつくりと由梨の提案を噛み締めるように、文哉は呟きながら言

葉を反芻させる。美食家向けのコース料理を評価するかのごとく一つ一つの要素を見つめていき、文字に適応できるかを審査する。

その解答を待つ由梨の心の中は、外の雨のように落ち着きがなかった。普段は睡眠導入に最適だとすら思っているその音も、今だけは結果発表を待つシェフへのドラムロールに聞こえてくる。

砂時計の落ちる音も、雨音にかき消されて身を隠している。そのせいでどれだけの間彼が考え込んでいるのかも分からなくなる。

文哉が彼に似合わないほど低い声を上げたのは、ちょうどその時だった。

「イラストが文字を表すなんて、父さんは考えもしなかった」

文哉は左隣に座った由梨の瞳を射抜き、脳内を見透かすほどしっかりと見つめてくる。

「文字の説明は文字か言葉。いつもそうだったし、そう信じて疑わなかった」

「……私も初めはそう思った。絵と文字は別々で、文字を勉強するのになんか使えるのか、って」

「でも、考えても不都合なところは見つからない」

そこで彼はわずかに口角を上げて、由梨の書いた出来立てのハートを優しくなでた。

「今日はそれでやってみようか」

ありがとう。端的で簡潔で、でも確かにしっかりと、文哉はそう言ってくれた。まるで紙に文字を書く時のような、一つずつの言葉を愛でるような口調で紡がれたその言葉は、由梨の知る他の言葉より

もずっと温かった。

「……昨日までよりは分かった、気がするけど」

由梨は背もたれに寄り掛かり、ずっと聞こえなくなっていた雨音を久しぶりに脳内へと通した。ひとしきり勉強した後には得られる心地よい疲労感と、まだ知りたいと思ってしまう自らの好奇心に板挟みにされる。

「でも……いけるかなって思ったのにな」

イラストを用いた勉強法、由梨命名のイラスト勉強は、確かに理解の促進に役立った気がする。慣れていけば一つの武器として、今後の学習に大いに貢献してくれる片鱗を覗かせてくれた

しかしながら、由梨はもちろん文哉でさえも、ただでさえ難解で理解しがたい文字をさらに抽象化するなんて芸当は、そう簡単になしえなかった。

ハート以外にも大樹、富士山、日本一高いタワーなんかを描いてみても、どうしても腑に落ちなかった。力強さだけはあっても、この「生」の字の持つ他の読み方がはまってくれないのだ。

由梨が若干あきらめ気味に、先ほどからやけに静かな文哉の方を見ると、そこには机に前のめりに向き合っている彼の姿があった。

彼の周りから、温度も音も、何もが消えているような錯覚に陥りそうになる。窓に伝う雨粒のように、彼は言葉を零した。

「どうして、文字を勉強してくれるの？」

文哉からの素朴な疑問だった。いつも通りの帰り道に聞いてきて

もおかしくないほどありふれた質問。でもその音だけが、彼の胸中を嫌というほど描写しているような気がした。

繊細でもろくて、乱暴に触ればたちまち砕け散ってしまいそうな声。彼の手元にある紙がくしゃりと音を立ててしわを作り、彼の手に籠められた確かな力を伝える。

「こんなに色々考えてくれて、毎日付き合ってくれて」

文哉の声が震える。小さくとも必ずそこにあっただけの芯が、教室を木霊する豪雨の破裂音に曝されているようだった。

「分からないよ、僕には」

由梨の前に立ち、常に手を引いて教えてくれた文哉から初めて聞く、分からないという言葉。なんでも知っていて、導いてくれるとさえ思っていた彼から言われたその言葉に、由梨はほとんど反射的に返していた。

「知ってほしかったから」

「……え？」

「文哉に知ってほしかった。言葉が持つ力を」

狼狽する文哉の手に自分の右手をそっと乗せる。まだ秋手前の時期なのに、彼の手は酷く冷たくて、ずっと小さかった。

彼のその様子は、明らかにいつもの彼とは違った。

口には出さずとも心の内に秘める信念に基づいて文字と向き合い続ける研究者の彼じゃない。それを悟り、幼馴染として言葉を告げる。

言葉ならもっと自分の想いを伝えられる。

「確かにすぐに消えちゃうけど、またすぐに生み出せる」

文哉の選択を、言葉よりも文字を選んだそのことを否定するつもりはない。それこそが今の文哉を彼たらしめていて、長所の一つであることも知っている。

でも、それで言葉を諦めるのはもったいない。

「文哉にもっとたくさん話してほしい」

わがままな由梨の願いに、文哉はしばらく何も言わなかった。由梨の手に包まれた左手が弛緩して、机と挟まれた紙のしわが跡を付けたまま伸びていく。

「……四月二十五日」

水面にしたたる一滴の雫。風が吹けば飛んでしまいそうなほど不安定な音が、文哉の口から発せられた。

「僕が父さんと、最期に話した日。言葉を交わした日」

ゆっくりと、自分の罪を吐露するように、文哉は答えを口にしていく。

「どこか遠い所へ行った。デバイスでの連絡もできないくらい、ずっと遠いところ。まだ子どもだった僕には、それしか伝えられなかった」

一つ、また一つと口にしていく彼に、由梨は無言でただ頷く。言葉を出さずに、文哉の続きを促す。

「父さんが教えてくれた文字で、手紙を送ろうとした。けど……足りなかった」

そこで文哉の言葉は止まった。続きを紡ごうとする肺の動きを、

齒で噛みちぎるような、そんな鳴咽にも似た姿だった。

少しの時を経て、由梨はそれが、昨日の答えだと気が付いた。文哉の文字への熱意の正体であり、今の彼を形作った骨組みともいえること。

幼馴染として、文哉の父親がすでに……という話は、母親から聞いたことがある。単身赴任である近宮家とは事情が違う、だから文哉の前で家族の話はタブーだというもの。

由梨にとっての師匠である文哉に文字の魅力を教えた人物であり、この現代に数少ない言語学者という方であり、由梨と文哉を繋ぎとめてくれた存在でもある文哉の父親。

「でも」

短く切られたその声と共に、彼は顔を上げた。声が震えていても、手が冷えていても、彼の目はいつも通りだった。優しいけどどこか頑固な瞳で、由梨と視線が交錯する。

「言葉だから伝わることもある、か」

文哉の黒い瞳が細くなり、自嘲の色を滲ませつつも口元に柔らかな弧を描く。

「心当たりがありすぎるよ」

文哉の左手がもぞもぞと動き、由梨の手を覆うように握る。男子にしては小さくて、でも広げると由梨よりはやっぱり大きくて。右手に伝わる感触から、彼が確かに居ることを肌で感じる。

「言葉も、重要。文字も言葉も使える君が言うなら、間違いないんだろうね」

「ほんと、数年かけて伝えてきた甲斐がありましたよ」

由梨のその言葉に、文哉は降参とでも言わんばかりに右手を小さく挙げた。

教室にはもう、大雨の環境音は響いていなかった。それだけ集中していたのか、勢いが衰えてきたのか。カーテンを閉めたせいでよく分からない。

「もう今日は帰らない？ 見たいクリアがあるから一緒に行こ」

「……わかった。用意する」

若干不服そうな文哉だったが、大人しく帰宅準備に取り掛かってくれて一安心。今までの二倍の量出された鉛筆を、一本ずつ丁寧に黒色の袋に仕舞っていく。水晶に傷をつけないような手つきで触れる彼の様子からして、まだ少し時間はかかりそうだ。

いつか、二週間くらい前だろうか。やけに久しぶりに感じながら、由梨は窓辺へと寄っていく。窓から差し込む光はすでに沈みかかっており、道路の蛍光灯は無機質な光を点々と灯し始めていた。

グラウンドに視線を移せば、サッカー部が今日も変わらず人工知能により定められたメニューをこなしていた。部員一人一人に專屬のコーチがつくのだから、サッカー部は優遇されていると言わざるを得ない。

凜が言うには、剣道には電子が不要らしい。古き良き武術に最新技術は合わないと言うけれど……。でも、効率を求めすぎないところは、文哉に少し似ているところを感じる。より良い練習や表現よ

りも、情緒や趣を重んじる。多少は分かっていたつもりだ。

視線を上にならしてみれば、私たちよりもずっと背の高いビルの窓には、空の模様が綺麗に投影されている。今日の色は燃えているというよりも、紅葉を張り付けたような、そんな柔らかい赤のような気がする。

後ろから文哉の足音が聞こえてくる。すぐ近くに来ても、もう驚くことはない。隣で何か言われようと、声をかけられようと。

たとえ、左手を握られようと。もう声を上げることはない。

「冷静だね」

「そりゃあ誰かさんのせいで慣れましたし」

「左様ですか」

思った通りの反応が来なかったためか落ち込んだ表情の文哉に、思わず吹き出してしまう。そんな子供みたいなしょんぼり顔を見せられては、堪えようもないものだ。

「ポーカーフェイスの名が廃るね」

「ポーカー……？ 僕のこと？」

「もちろん。小学校の時言ってたじゃん。僕はポーカーフェイスなんだーって」

「……………記憶にない。知らないよ。そんな記憶」

由梨の瞳をじっと見つめていた文哉が顔を下にそむける。いたずらがバレた小学生が、今の文哉を表す一番分かりやすい表現だと思う。やはり文哉にこの言葉はあまりにも似合わない、由梨は改めて確信した。

文哉の言葉を最後に、二人の間を沈黙が包む。互いに何も言わず、でもそれがなぜか心地いい、不思議な空間。どんな言葉を使っても、この空気を表現できる気がしない。どれだけ重ねても、軽すぎるような、蛇足のような。

本日最後の砂時計が役目を終え、この教室にも金属製の鐘の音が鳴り響く。

文字がなくなったからこそ、日常に溢れだした様々な音。音量も、音色も、音調も。バラエティに富んだ音がたくさんある世界で、この教室には冷たい金属音だけ。二人とこの教室だけが、この音に満ちた世間から切り離されているかのようだった。

言葉では表せない想いに、書くことで時間に乗せる。

「きつと、こういう気持ちだが、文字を作ったんじゃないかな」

ふと口からこぼれたのは、そんな気持ちの破片のような言葉。多分この言葉では、聞こえたところで由梨の意図など一割も通じない。でも、文哉なら……。そんな臍氣ながらも確信めいたものを、心の中に温もりとして感じる。

「うん」

彼がそう言うと、由梨の左手に優しい力が伝わる。

「僕も、分かった気がする」

窓の外から文哉の瞳へと目を移す。話すタイミングを探しているような文哉を、無言のうちに促す。いつも通りの、一文字ずつなぞっていくようなゆっくりとした速さで、文哉は言葉を紡ぐ。

「こういうことを、言葉に表すんだろうね」

「……」

ひたすらに溜めて編まれたその音が消えて、部屋に無音が広がってから、二人分の笑い声がこの二号館の空き教室を包んでいった。